

シンポジウムタイトル： 「インターネット時代の新しい映像制作と配信の形を探る」

開催趣旨・目的：日中を中心としたアジアの映像マーケットを見据えた教育、共同制作や配信についての現状や課題を討議しながら、未来の映像制作振興についての可能性を探る目的で開催します。

パネリスト：

日本：小野光輔（映画プロデューサー）、渡辺紘文（映画監督）

中国：宿志剛（北京電影学院視聴メディア学院長、写真家）、若手映像制作者（出品作品の監督を予定）

司会：石飛徳樹（映画評論家、朝日新聞）

* 敬称略、順不同



小野光輔 Kosuke Ono

1963年神奈川県出身。慶應義塾大学文学部卒業後、14年間、東宝株式会社に勤務。その後、『クリアネス』(08/篠原哲雄監督)、日台合作『闘茶』(08/王也民監督)をプロデュース。東京国際映画祭日本映画・ある視点部門で作品賞を受賞した『歓待』(10/深田晃司監督)、『おだやかな日常』(11/内田伸輝監督)、ナント三大陸映画祭でグランプリに輝いた『ほとりの朔子』(13/深田晃司監督)等を製作。またプロデュース作『欲動』(14/杉野希妃監督)は釜山国際映画祭で『雪女』(16/杉野希妃監督)は東京国際映画祭のコンペティションで上映される。東京国際映画祭アジア三面鏡『死に馬』(16/ブリランテ・メンドーサ監督)に制作兼出演で携わる。2018年にはコプロデューサーとして関わった『21世紀の女の子』が東京国際映画祭にて上映される。SKIPシティD国際映画祭審査員、福岡アジアフォーカス映画祭アドバイザー、京都大学地域研研究員など、映画製作以外にも活躍中。EUの2大プロデュース組織であるACE、EAVEに所属している。デジタルハリウッド大学客員教授、福岡女学院大学講師。

小野光輔(映画プロデューサー)

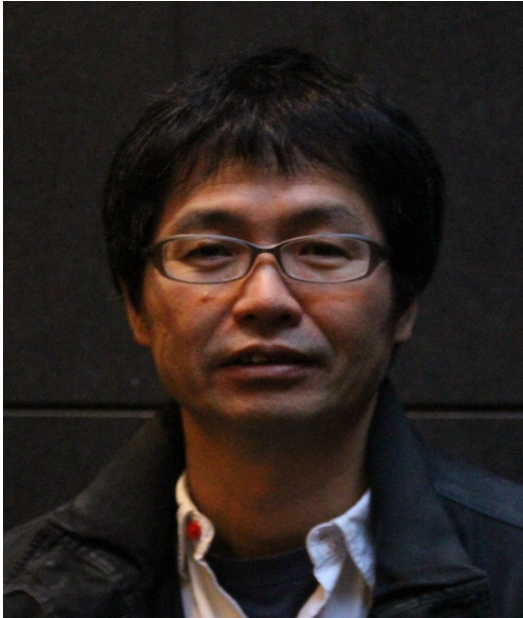


渡辺紘文(映画監督)

渡辺紘文(映画監督)

1982年栃木県大田原市生まれ。映画監督、脚本家、プロデューサー。日本映画学校にて天願大介監督に師事。2009年、日中韓共同横浜開港150周年記念映画『3つの港の物語』日本篇『棧橋』監督。色川武大の遺稿『狂人日記』の舞台化などを経て、13年、故郷にて弟・音楽家の渡辺雄司と共に映画制作集団 大田原愚豚舎を旗揚げ、第一回作品『そして泥船はゆく』が第26回東京国際映画祭他世界各国の映画祭に出品される。以降15年『七日』、16年『プールサイドマン』、17年『地球はお祭り騒ぎ』とデビュー以来4作連続で東京国際映画祭日本映画スプラッシュ部門に出品され、注目を集める。特に『プールサイドマン』では、第29回東京国際映画祭 日本映画スプラッシュ部門作品賞受賞他、カルロヴィーヴァリ国際映画祭、ユーラシア国際映画祭出品、NIPPON VISIONS JURY AWARD受賞など、国際的にも好評を博した。

大田原愚豚舎 <https://foolishpiggiesfilms.jimdo.com>



石飛徳樹 Noriki Ishitobi

1960年、大阪市生まれ。神戸大学法学部卒業。84年、朝日新聞社入社。現在、東京本社の文化くらし報道部で主に映画を担当。カンヌやベネチアなどの国際映画祭や米国アカデミー賞のレポートも行っている。2001年から10年余り、キネマ旬報誌で「テレビ時評」を連載した。著書に新聞の連載を集めた『名古屋で書いた映画評150本』（徳間書店）、編著書に高倉健の最後の映画を扱った『もういちど あなたへ』（朝日新聞出版）。

石飛徳樹（映画評論家、朝日新聞）



宿志剛 Su Zhigang(シュク シコウ)

1961年生まれ。中国を代表する写真家。

35年間写真撮影の教育に従事し、これまで中国国内約100大学で講義を行っ

てきた。中国メディア界で最も影響力を持つ人物のひとりである。

北京電影学院視聴メディア学院長、教授、博士指導教員

元北京電影学院写真学部長、北京電影学院トレーニングセンター元理事

国家写真芸術展、中国青年写真芸術展、山東国際写真ビエンナーレ、麗水国際

写真祭、平遥国際写真祭、中国写真金像賞などの審査員及びキュレーター、ま

た、公安省三微コンテスト、国家政治法律委員会マイクロフィルムコンテスト、

国民健康計画委員会映画コンテスト、中国大学生マイクロフィルムコンテスト

などの審査員を務める。

宿志剛

(北京電影学院視聴メディア学院長、写真家)